

大正期の泡沫会社発起とリスク管理

河野英良と彼のパートナーを中心として

小川 功

はじめに

大正6年9月ある信用調査機関は日刊の機関紙上で加盟会員に対して次のような「会社熱勃興に対する警告」を発した。「時局発生以来、本邦事業界の振興は真に驚異に値するもの有之、新設会社の勃興、既設会社の拡張等日も尚足らざるの観あるは国家の為め御同慶の至りに存候。然るに所謂会社屋連、虚業家連の暗中飛躍も亦之を機として随所に起り、不真面目極れる計画を樹てて之を誇大に吹聴し以て投資家を誘惑せんとする者不尠、実に油断難相成り儀と存候」¹⁾

同記事のある1面には「宝永銅山株式計画」「早川電力計画再燃」など、新設会社の勃興記事が満載されている。この宝永銅山計画のプロモーターは河野鉦業所なる鉦山ブローカー、早川電力の場合は船成金として名高い内田信也の実兄に当たる窪田四郎²⁾の主宰する窪田事務所であった。

本稿では大正バブル期の泡沫会社の発起に深く関与した人物のサンプルとして、「幾多株式会社の重役たる」(T8.4.16内報)河野鉦業所主・河野英良のリスク管理面での資質を

とりあげたい。特に河野に着目した理由は、筆者の一連の「虚業家」研究³⁾の対象として、また近年開始した鉦業等ハイリスク分野のリスクテーカー研究⁴⁾の対象として、現在執筆中の「会社魔」松島肇らとともに好適標本と思量したためである。本稿では大正の年号は原則として省略するとともに新聞雑誌会社録、頻出資料等は略号⁵⁾で本文中に示した。

本稿は経営史学会関西部会で報告⁶⁾したものの一部であり、滋賀大学リスク研究センターの金融リスク等に関する共同研究プロジェクト成果の一部を構成する。なお登場人物のうち主要なものの経歴等は 一括して示した。

3) 拙稿「企業家と虚業家」『企業家研究』第2号、企業家研究フォーラム、平成17年6月、同「“虚業家”高柳淳之助による似非・企業再生ファンドの挫折 - ハイ・リスクの池上電気鉄道への大衆資金誘導システムを中心に - 」『滋賀大学経済学部研究年報』第11巻、2004年12月、同「“虚業家”集団『高柳王国』の形成と崩壊 - 大衆資金のハイ・リスク分野への誘導と収奪 - 」『彦根論叢』第351号、2004年11月、同「『企業家』と『虚業家』の境界 - 岩下清周のリスク選好度を例として - 」『彦根論叢』第342号、2003年6月、同「“虚業家”守山又三のハイ・リスク行動と京都財界」『京都学園大学経済学部論集』第12巻第2号、2002年12月、同「生保破綻と“虚業家”による収奪 - 九州生命詐欺破産事件と河村隆実のリスク選好 - 」『滋賀大学経済学部研究年報』第9巻、2002年12月

4) 拙稿「鉦業投資とリスク管理(序説) - 鉦業リスクの諸態様を中心として - 」『彦根論叢』第355号、2005年9月、同「証券業者による鉦山経営とリスク管理 - 八溝金山事件を中心として - 」『彦根論叢』第354号、2005年5月参照

1) 大正(以下略)6年9月7日『帝国興信所内報』

2) 窪田四郎は船成金として著名な内田信也の実弟。明治29年東京高商卒、兄と同じく三井物産入社、本店、神戸、香港、上海、漢口等各支店勤務後、北海道炭砒汽船の支配人を経て、「大正二年佐見鉦業株式会社専務取締役となったが、翌年独立して窪田事務所を開き、主として南洋貿易等に従事」(『銀行会社事業興信録』昭和8年、人事興信所、p305)、富士製紙専務、早川電力社長、台湾銀行相談役その他多数の役職を兼務。

・「事業屋」河野英良

河野英良の略歴

河野英良（千駄ヶ谷町大字穩田）は明治11年8月17日下関の河野中の三男に生れ、豊浦中学、山口高校、米国スタンフォード大学で学んだ。⁷⁾河野は3年3月の調査では会社員、正味身代無、商内高未詳、信用の程度下から2位Da（商T3,p174）で、4年4月下北半島沖で沈没した鉄製汽船の解撤引揚げを試み、6,500円で仲間と船主から共同購入した事実が確認できる。しかし利益配分のトラブルから共有者の一人から「金二万五千円の共有権確認並に所有物返還の訴訟を提起」（T6.11.7内報）された。河野が船舶ブローカーとして、現実に訴訟リスクを被るようなハイリスク分野の仕事を盛んに行っていたことがうかがえる。河野は6年発行の『全国株主

要覽』に該当なく、6年9月の調査では雑業、正味身代、商内高ともに未詳、取引先の信用の程度は5段階の下から2位Da、所得税...円（商,p43）と概して低信用であった。6年12月常盤採炭発起人（T8.10.28内報）、7年には富士ラミー工業取締役⁸⁾、8年には「今や一千五百万円の龐大なる巨資を擁して侮るべからざる勢力を我が海運界に有」⁹⁾する日本海運¹⁰⁾取締役として、「創草の当初より苦節を共にし...今日の大を建設せる...実行の人、機略の人」¹¹⁾として「海運界に其人ありと知られたる徳望手腕兼有者」¹²⁾と評された。

日本海運辞任後、船舶にとってベースカーゴにもなる鉱石・鉱山に仲立業の範囲を拡大したものが、河野は東京市京橋区三十間堀3-6に「河野鉱業所」（T6.9.7内報）なる鉱山ブローカーを開業した。こうした関係から河野

5) (新聞) 法律...法律新聞、鉱業...日本鉱業新聞、内報...『帝国興信所内報』帝国興信所、東日...東京日日新聞、読売...読売新聞、時事...新報、報知...報知新聞、北海...北海タイムス、岩毎...岩手毎日新聞、徳毎...徳島毎日新聞、保銀...『保険銀行時報』

(雑誌) D...『ダイヤモンド』、藤本...『藤本ビルブローカー銀行週報』、増田...『増田ビルブローカー銀行旬報』、B...『銀行通信録』

(会社録・信用録) 株...『株式年鑑』野村、大阪屋、諸...『日本全国諸会社役員録』商業興信所、帝...『帝国銀行会社要録』帝国興信所、要録...『銀行会社要録』、帝信...『帝国信用録』帝国興信所、14年、商...『商工信用録』38版』東京興信所、7年、紳...交詢社『日本紳士録』交詢社、人...『人事興信録』、通覧...農商務省編『会社通覧』8年12月未現在、

(頻出資料) 新富豪...『新富豪物語』6年1月24日～5月10日『時事新報』88回連載、事業...『地方人を食った事業屋』9年2月20日『東京経済雑誌』、大審民...『大審院民事判例集』、名鑑...『日本鉱業名鑑』7年、名鑑13...『日本鉱業名鑑』13年改訂版

6) 「鉱業投資とハイリスク管理 - 虚業家の関与と事例を中心として - 」平成17年4月23日（於大阪学院大学）

7) 『大日本実業家名鑑』8年、かp9

8) 9) 11) 12) 『大日本重役大観』8年,p35,p360

10) 日本海運¹⁰⁾は第一次大戦中の6年9月15日「船舶の所有、売買、貸借其他一般の海運業、船舶及機械の新造修理販売其他一切の付帯事業」（『大日本実業家名鑑』8年、p13）を目的に資本金1,500万円で設立された。定期市場への上場が伝えられると「価格の騰貴を見越して之が買取に暗中飛躍を試みる投機者続出の傾向あり」（T8.9.20内報）とされたように、多分に投機銘柄であった。株主数939名、伏木丸2,350トン、福勢丸1,838トン、福洋丸5,500トンを保有（株T8,p452）、9年には資本金1,500万円、専務林鈴彦（元物産船舶部員）8,000、取締役谷道耕太郎〔千代田汽船取締役（新富豪30,T7.2.27時事）〕、犬上慶五郎〔小樽の回漕店主、第五札幌丸ほか6隻を保有し、資産額1,000万円近い船成金（新富豪59,T7.4.3時事）〕、北海道鉱業鉄道取締役（『大日本実業家名鑑』8年、p24）〕、10,000、原安三郎、橋本喜造 10,550、佐伯俊太郎〔原田汽船支配人を経て南洋郵船専務、6年12月谷道耕太郎と千代田汽船取締役（新富豪30,T7.2.27時事）〕、監査役松本良太郎〔釧勝興業監査役（名鑑p60）〕、南洋郵船取締役、日本無砂精米監査役（要録T5）、東京食品市場監査役（要T11,p99）〕

7,000、高木七五郎、東条三郎、非役員大株主馬場道久7,600株（要録T9,p46）

は一時、当時急速に拡大しつつあった大日本炭砒¹³⁾専務の座に就いた。大日本炭砒では千沢平三郎〔 . 参照〕も旧1,812新3,458計5,270株主¹⁴⁾であった。詳細は未詳だが、なんらかの問題が発生し比較的短期間で「大日本炭砒の専務を追はれ」(事業)た模様である。このころ既に河野の世評は必ずしも芳ばしくはなかったようで、たとえば南郷三郎、喜多又蔵、加島安次郎の「諸君が...河野君が関係して居る会社であるならば御免を蒙る」(事業)と役員就任を拒否したといわれる。

6年ごろから河野は宝永銅山、東日本炭砒、日本ペニー紡績など多数の新設会社を「相尋で創立し、其成るや以上各社の専務取締役に推され、爾来縦横の才腕を揮ひ...又盛なりと謂ふべし...酒を嗜まず、茶にも親しまず、事業等其ものを無二の趣味とす」¹⁵⁾と評された。河野は9年には宝永銅山専務、東日本炭砒、日本ペニー紡績、東亜耐火工業各取締役、馬関製紙監査役(要録,T9, 役上p208), 10年には宝永銅山、帝国土地開墾、東日本炭砒、北辰炭砒、国粹美術、中央興業各取締役(要録,T10, 役上p260)で、日本ペニー紡績、東亜耐火工業、馬関製紙は該当なし。10年には日本耐酸塗料社長、宝永銅山、帝国土地開墾、東日本炭砒、北辰炭砒、国粹美術、中央興業(旧中央紙器)、鮫川電力各取締役(要録,T11, 役上p203)を兼務していた。河野は日本ペニー紡績 960株(要T9,p42)、東日本炭砒

3,500株(要T9,p281)など関係企業の大株主ながら、『全国株主要覧』9年版に記載なく、重要会社の300株以上の株主には登場しない。

14年4月現在では河野(東京府奥多摩郡渋谷町字渋谷)は所得税48円、大日本土地、国粹美術、湘南漁業各社長、鮫川電力、宝永銅山各専務、業資協調会常務理事(紳T14,p274)であったのが、14年ころ河野は大日本土地取締役のみ(要T15,役上p171)となり、急速に経済界から姿を消しつつあった。14年前後の主要会社の100株以上の株主を名寄せした『全国株主年鑑』¹⁶⁾にも河野の記載はなく、14年発行の『帝国信用録』では元会社役員、対物信用・負債、対人信用簿、年商未詳、盛衰は衰(帝信,p117)と河野の末期的な債務超過状態を伝えている。

河野の司法的結末は以下の通りである。河野は「大正十四年十一月末日金額三万五千元、振出日大正十四年十一月三十一日、満期日大正十五年六月三十日、振出地東京市ナル約束手形ヲ上告人<峯岸慶蔵>ニ宛テ振出し」¹⁷⁾「曆ニ存セサル日ヲ振出ノ日トシテ記載シタル約束手形ハ無効」¹⁸⁾として訴訟になっている。この上告人峰岸慶蔵〔 . 参照〕は河野の事業上の仲間と目された人物である。

昭和3年7月発行の『日本紳士録32版』¹⁹⁾に河野は掲載されていない。河野は「昭和四年十一月二十一日...第一審裁判所ニ於テ敗訴...昭和四年十二月十八日破産法第二百四十八条ニヨリ訴訟手續ヲ受継クト同時ニ控訴ヲ為シ、訴訟当院ニ繫属中破産手續ノ解止アリ...昭和四年十二月二十四日午後一時東京区裁判所ニ於テ破産宣告ノ決定ヲ受ケタ」²⁰⁾

13) 大日本炭砒は明治40年10月創業の個人経営を改組、5年12月山本條太郎らの勧誘で古賀春一は山口県宇部の本山炭砒を資本金100万円で創立した。6年7月本山炭砒が常磐の茨城炭砒(高萩、秋山両砒を買収し3年設立)を合併し大日本炭砒と改称した。6年9月さらに三星炭砒を合併、磐城砒業(池上電気鉄道社長の芳川寛治が関係)を買収して、6年11月には資本金を1,000万円に増資した。(『株式会社年鑑第一回』11年,p15,『現代実業家大観』昭和3年,こp5)

14) 『全国株主要覧』9年版,上p326

15) 『大日本実業家名鑑』8年,かp9

16) 『全国株主年鑑』経済之日本社,15年

17) 18) 『大審院民事判例集』第10巻,昭和7年,法曹会,p263

19) 掲載基準は所得税50円,営業税70円以上

20) 昭和五年(オ)第千五百九十九号 大審院第五民事部判決(S6.10.23法律)

以下河野の関係した企業を原則として設立順に取り上げる。

大日本土地（5年10月設立）

大日本土地は5年10月設立され、15年には本店京橋区山下町1、資本金60万円、払込30万円、取締役河野英良、三谷洋（兼務なし）、小西伝七〔宝永銅山取締役（要T15, 役下p115）〕、野田亀吉〔荏原郡池尻、兼務なし（要T15, 役下p14）〕、監査役英修作〔参照〕であった。かつては春日俊文〔参照〕も取締役であった。（要T15, 役上p191）

宝永銅山（6年11月設立）

宝永銅山は青森県三戸郡上郷村大字関に所在する面積30.1万坪の銅山で、宝永銅山会社設立寸前の6年10月末日現在は村井吉兵衛（日本橋区元四日市町9）が個人で鉱業権を所有していた。4年の鉱産額は銅精鉱50トン、2,169円、5年空欄（名鑑,p69）で、「未だ良好なる鉱脈を発見し能はざりし」（T6.9.7内報）状態であった。宝永銅山会社設立の時期には村井財閥には大きな組織変更が相次いで発生した。一つは6年11月22日の株村井銀行の設立で、もう一つは6年12月に村井吉兵衛個人経営の石炭部、鉱業部を分離独立し村井鉱業株式会社が村井銀行本店内に設立された。村井鉱業に対する村井銀行の信用貸付金は267.2万余円²¹⁾であった。分離の直前に宝永銅山だけが宝永銅山会社発起人たる河野の河野鉱業所に売却された。村井側から考察すれば宝永銅山の処分は一連の村井財閥組織変更の一環としてお荷物のヤマの切り離しと考えられる。なお河野の取引銀行は村井銀行であった。²²⁾

貧鉱だったはずの宝永銅山は不思議にも

21) 昭和3年2月27日提出和議整理委員天野弘「意見書」

22) 『大日本実業家名鑑』8年、かp9

「河野鉱業所に移ると共に数条の鉱脈に逢着...日産一千余貫を採掘し一ヶ月四五千円内外の純利益を示す」（T6.9.7内報）優良銅山に変貌中との触れ込みで、採掘従業員を増産する「十月以降は一ヶ月五万二千貫余の鉱産額に達する予定」（T6.9.7内報）と報じられた。河野が発表した「目論見書」によれば、青森県三戸郡上郷村の鉱区181.1万坪を15万円で買収し、2.5万円を施設一式、8,000円探鉱費、1万円鉱道開削費、3,000円鉱夫長屋増設費、2,000円選鉱場拡張費、2.5万円溶鉱炉2基、3,000円レール増設費、1,000円ズリ棄場諸費、1,500円準備費、50円創立費、26,500円運転資金にそれぞれ充当する予定であった。（T6.9.7内報）

宝永銅山(株)は河野を中心に、広沢金次郎〔参照〕を創立委員長に戴き、峰岸慶蔵〔参照〕、平出喜三郎〔参照〕、岩崎清七、杉田義雄らの発起により、6年11月5日資本金100万円（払込25万円）で鉱石採掘を目的として東京市京橋区三十間堀3-6（河野鉱業所内）に設立された。社長広沢金次郎、専務河野英良、取締役森田小六郎〔参照〕、平出喜三郎、千沢平三郎〔参照〕、監査役峰岸慶蔵（前出）、都筑六郎〔参照〕、小幡貞吉²³⁾であった。（株T8,p628）

河野は「宝永銅山株式会社に取締役となり、千沢平三郎氏、森田小六郎氏、平出喜三郎氏等と協力同心して能く社長広沢伯を扶け、孜孜として業務の拡張に努め」²⁴⁾、「河野君

23) 小幡貞吉（本郷区湯島三組町）は6年12月「有らゆる欺瞞的手段を弄して成立を急」（T8.10.28内報）いだ常盤探炭発起人・監査役となり、山形炭砒、東京商工、東北石炭各取締役（要録,T9役上p125）、東北石炭取締役（名鑑13,p32）。山形炭砒は8年設立、12年8月ころ廃業、柴田清蔵らが継承し北郡炭礦を設立（『東北鉱山風土記』昭和17年,p352）

24) 『大日本重役大観』8年,p360

に至っては、大日本炭砒の専務を追はれてから、或は自分で出てやったのだと言ふかも知れないが、兎に角罷めてからは宝永銅山のみに専門に守って居た」(事業)とされた。

「煽り屋」(事業)の河野らが宝永銅山の鉱量は5億万貫で、「会社設立と同時に現鉱主の事業を継続するものにて、現在の収益は第一回払込資本に対し確実に年四割以上に相当し、有利なる既設会社の新株と其實質を同うし居る」(T6.9.28読売)などと吹聴した結果、「公募情態頗る良好」(T7.11.7内報)で、「銅価の好況な時分であったから、沢山な金を散じて有望の如く吹聴させ、株式募集をやって成功した」(事業)、「全国に亘り株式申込非常に多ければ...公募株数の数倍に達する」(T6.9.28読売)ものと報じられ、7年上期の株主数は376名(株T8,p628)、9年下期の株主数は386名の多数に達した。²⁵⁾

河野らの発表によれば第1期の「操業僅かに二ヶ月に過ぎざるも...探鉱掘伸等非常に進捗し...総延長数は約五千八百尺以上に達し...昨今尚一日二千貫内外の粗銅を生産しつつあり。殊に十二月月上旬よりは昼夜交替作業の結果一日二千五百貫内外の算出を見るに至」(T6.12.19内報)った成果として、「僅々五十六日間の営業期間に於て...一万八千九百五十九円の収入を得、年三割強の配当をなし、新設会社として空前の好成績を示し」(T9.5.1鉱業)たと宣伝、12.5円払込の株価が25円にもなるほどであった。しかし第1期の売鉱15万貫には意識的に貯蔵中の「前経営者より繰越されたる」(T6.12.19内報)在庫が相当量含まれており、これを一挙に処分した結果の水増しの「空前の好成績」であった可能性が高い。

7年6月期の鉱区勘定は17.5万円、土地建

物什器2.1万円、軌道0.8万円、興業費1.0万円、未払込株金を控除した総資産は29.6万円であった。(株T8,p628)7年6月期は当期利益3.7万円を捻出して、「確実に年四割以上に相当」(T6.9.28読売)すると吹聴した配当率でなんとか25%(株T8,p628)を確保した。『日本鉱業新聞』の分析記事によれば「初配当と云ふ心理も多分に働いて、収益配当ではなく、資本配当をやったための好成績で...正当に決算するならば...収益低下し、第五期の如き一万八千余円の欠損となる勘定」(T9.5.1鉱業)だと、当社の異常決算ぶりを指摘している。25万円払込を第2回払込を徴収して40万円とした7年12月期の会社側の強気の予想では「採鉱額が前期より増進して少なくとも五十二三万貫に上り、且つ売鉱価額が前期より二三万円方(百貫目)の騰貴を来たしたれば、今期純益は前期の四万二千円に対し、凡そ五万円見当」(T7.11.3内報)で配当率25%据置が報じられた。

宝永銅山は河野の巧妙な宣伝とは裏腹に「元来が左程有望でもなかったものと見え、広告程の利益も挙がらず」(事業)、25%もの高配当率もその後5%台に落ちて、8年12月期には26,385円の損失金を出すなど(通覧p5)、「段々と尻細りの態で、胆斗の如き河野君でも、之には閉口して居る」(事業)とされた。

欧州大戦の休戦による銅価の相次ぐ暴落で、とうとう銅山経営が成り立たなくなり、「此難局を転換せんとして、当事者が案出したのは炭山の経営」(T9.5.1鉱業)であった。南千住の石炭商・石井留蔵(紳T11,上p44)から常磐炭田の宇佐美炭礦の鉱業権の半分を6.3万円で購入、翌8年上期には12.5万円ですべてを購入した。石井留蔵は6年6月の調査では11年前に石炭商を開業、正味身代5,000~1万円、商内高5~7.5万円、取引先の信用の程度は5段階の中位C a、5年度の所得税

25) 宝永銅山『第七回営業報告書』9年下期

7円(商,p43)であったから、石井留蔵にとって宇佐美炭礦の売価12.5万円は1件で2年分もの大商いであった。この結果として「銅山に投ぜられた資金は全部固定して、実際働いて利益を生むのは<宇佐美>炭礦に投ぜられた一少部分に過ぎなくなった」(T9.5.1鉱業)のであった。しかも宇佐美炭礦は「常磐炭中、炭質に於て劣等のもので…採炭経費は炭質の如何に拘らず廉なる能はざる」(T9.5.10鉱業)ため、「炭質粗悪廉価で収支償はない」(T9.5.10鉱業)鉱区だと『日本鉱業新聞』は断定した。19.8万円も投じた当社は転換策にあせて「宇佐美炭礦の価値を十分に調査評価しなかった」(T9.5.10鉱業)ものと非難した。そして「宇佐美炭礦の如き炭質粗悪なる炭礦は忽ち休山の悲境に陥るは明か」(T9.5.10鉱業)と断定した。結局宇佐美炭礦は『日本鉱業新聞』の指摘通り「事業ノ遂行ハ損失ヲ重ヌルノ状態ニテ経営至難」²⁶⁾に陥ったため、「単ニ石炭ノ採掘販売ニ重キヲ置クヨリモ寧ロ…各種鉱石金属等ノ依託販売ヲ為スノ有利ニシテ安全ナルヲ認メ」²⁷⁾、9年下期に「金十五万円ヲ以テ宇佐美炭礦ヲ売却シ内十万円八買収当時ノ借入金償還ニ充當シ、金五万円八六ヶ月間二月賦ヲ以テ受領」²⁸⁾したが、「受取勘定」5万円はそのまま固定化した。²⁹⁾

9年9月6日宝永銅山取締役の千沢平三郎(前出)、春日俊文(前出)、監査役峰岸慶蔵(前出)が揃って辞任し、取締役に渡辺三郎³⁰⁾、監査役に英修作[. 参照]が就任した。(T9.10.20鉱業)宝永銅山監査役だった峰岸

は日本ペニー紡績、東日本炭砒、一柳産物各取締役(要録,T9役下p139)で、春日も帝国土地開墾取締役であり、ともに河野の事業上の盟友と目されるだけに、この時期の辞任は宝永銅山の経営を巡る内部対立の様相を示すものとして注目される。峰岸は9年12月27日東日本炭砒の取締役の方も辞任(T10.3.1鉱業)し、逆に日本ペニー紡績では河野英良が専務を退任するなど、河野と峰岸との間の約束手形を巡る訴訟の素地がこの辺の離反に生まれたものと解される。

宝永銅山の営業報告は宇佐美炭礦売却の件を「決シテ低廉ナルモノニ非スト確信シテ之ヲ断行セリ」³¹⁾と正当性をことさらに強調するが、低廉との反対論が内部に潜在したことを暗示しよう。さらに10年1月28日宝永銅山取締役の都筑六郎も退任した。(T10.4.1鉱業)10年7月29日宝永銅山監査役の鈴木富士弥(弁護士)も辞任した。(T10.10.1鉱業)11年では払込40万円、専務河野英良、取締役渡辺三郎(前出)、山崎佐太郎³²⁾、監査役英修作(前出)、高木七郎³³⁾であった。(帝T11,p82)

東日本炭砒(7年9月設立)

東日本炭砒は綾部惣兵衛³⁴⁾、河野英良、竹村欽次郎[. 参照]、荻野万之助³⁵⁾、森田小六郎[. 参照]らの発起により、

32) 山崎佐太郎は中央興業取締役(要録,T10,p126)、東日本炭礦取締役(要録T15,p223)、宝永銅山取締役(帝T11,p82)

33) 高木七郎は鮫川電力取締役 2,705株主(要録,T10,p241)、石城耐火煉瓦、中央興業<野田龜喜が監査役>各取締役(帝T11,職p248)、宝永銅山監査役(帝T11,p82)、中央興業各取締役(帝T11,職p248)

34) 綾部惣兵衛(川越)は中武銀行取締役、関東印刷監査役(帝T11,職p469)

35) 荻野万之助(神奈川県橋樹郡生見尾村)は会社員(商,p165)、原町紡織専務(紳T11,上p160)、日本ペニー紡績常務500株、日印紡織発起人

26) 27) 28) 31) 宝永銅山『第七回営業報告書』9年下期

29) 宝永銅山『第八回営業報告書』10年上期

30) 渡辺三郎(東京)は河野の姉チヨの夫(『大日本実業家名鑑』8年、かp9)、5年時点で『全国株主要覧』6年になし。宝永銅山取締役T9/12 27100株、帝国土地開墾取締役(要録T11,p197)

「一、石炭の採掘販売，二、炭礦の購入及売却，三、前項の目的を達するに必要な一切の業務」(T7.9.15内報) を目的として7年9月13日資本金200万円，払込50万円で京橋区尾張町2-23 (後に南紺屋町) に設立された。主力の広野鉱区 (96万余坪) は福島県広野に所在し広野炭礦，高倉炭礦，瑞穂炭礦 [東日本炭礦との間に紛擾を惹起し (T8.1.18内報)，「経営困難に陥れる幾多の炭業会社を買収する」(T8.9.30内報) 計画の垂細亜炭礦との間に「目下買収の交渉中」(T8.9.30内報)]，高田炭礦に隣接，木戸鉱区 (40万坪) は福島県木戸に所在した。同社の「起業目論見書」では第1期は急進的採掘方法により炭層四尺の露頭掘りを行い，一等炭40.3万円，二等炭10.7万円，粉炭6.7万円，合計58万余円の収入を計上し年30%配当，坑道を開削して採炭する第2期には115.8万円の収入，年50%配当を謳っていた。(T7.8.2内報)

出張所を隅田川，鉱業所を広野，平に置き (要録 T11,p243)，設立時の役員は専務河野英良，取締役峰岸慶蔵 (前出)，上甲信弘³⁶⁾，小口長蔵³⁷⁾，中山佐市 [参照]，山崎礼三 (静岡県飯田村)，堀内伊太郎 (神田区鍛冶町，馬関製紙取締役)，監査役綾部惣兵衛 (前出)，竹村欽次郎 (前出)，荻野万之助 (前出) であった。(T7.9.15内報)

7年11月第一期決算は営業期間3カ月にもかかわらず，2.8万円の利益を揚げたと称して，12%もの剰配当を行なった。この「新設会社として空前の好成績を示」(T9.5.1鉱業) す陽動作戦は「僅々五十六日間の営業期間に於て...年三割強の配当をなし」(T9.5.1鉱業) て株価をつりあげた宝永銅山での二番煎じで

36) 上甲信弘 (横浜市山手町) は日本ペニー紡績取締役，東日本炭礦取締役

37) 小口長蔵 (赤坂区青山南町) は貸金業 (商,p123)，日本ペニー紡績1,500株主，東日本炭礦 1,000株 (要 T9,p281)，岩手鉱業発起人総代 (T7.11.16内報)

ある。さらに8年5月第二期決算でも「起業費又は設備費の内へ繰入れて利益の捻出を図」(T8.9.11D) るなど「一見明瞭なる虚偽の決算」(T8.9.11D) を継続した。8年5月期という「炭価の最盛時に於て斯く事業の不振に陥りたるは炭質の劣悪なる為」(T8.9.11D) で，『ダイヤモンド』誌は「創業時代から斯様な無理の配当をするやうでは，前途益々困難に陥るであらう」(T8.9.11D) と予想した。

8年11月期の主要勘定は資本金200.0万円 (うち払込78.8万円)，鉱区45.3万円，起業費13.1万円，軌道8.2万円，土地建物5.6万円，未収入金4.3万円，受取手形4.1万円，貯炭7.6万円，預金5.0万円，支払手形12.3万円，繰越・当期利益1.9万円であった。(要 T9,p280) 8年11月期の株主数は989名，大株主は 河野英良3,500，峰岸慶蔵2,100，河野高³⁸⁾ 1,180，小口長蔵 (取締役) 1,000，小口正一1,000株 (要 T9,p281) であった。9年12月27日取締役久我常通，峰岸慶蔵 (前出)，監査役竹村欽次郎 (前出)，友成四郎 (前出) が辞任した。(T10.3.1鉱業)

東日本炭礦では「当 < T10/5 > 期は重役の更迭によって各方面の整理を断行し，経営方針を一変」(T10.9.1鉱業) したと説明した。しかし10年5月ころ不況のため信州方面の絹糸工場への掛売約4万円が回収不能となったのに加え (T10.6.1鉱業)，「炭質粗悪なると貯炭多大に上る為，採算不能に陥った」(T10.6.1鉱業) 赤井村所在の東日本三星炭坑が「殆ど休山同様」(T10.6.1鉱業) となり，10年の鉱産額は671トン，11年950トンに過ぎず，内郷村の「宮坑は...現在当社唯一の資源」(T10.6.1鉱業) として，10年の鉱産額4,596トン，11年5,039トン，東日本炭坑は10年5,875トン，11年4,998トンであった。(名鑑13,p126)

38) 河野高は河野英良の母タカ，安政元年生れ (『大日本実業家名鑑』8年，かp9)

鉱業信託³⁹⁾は10年8月15日の臨時総会で資本金を100万円から30万円に減資の件と、東日本炭砒と合併(鉱業信託20円払込1株に対し東日本炭砒25円払込1株を交付)の件を可決した。(T10.9.1鉱業)11年には東日本炭砒は資本金を30万円に減資した鉱業信託を合併の結果、資本金は230万円、払込89.3万円(旧株4万株@20円払込、新株6,000株@15.5円払込)となり、専務河野英良、取締役都筑六郎(前出)、清水達也⁴⁰⁾、藤木松太郎(日本橋区浜町)、監査役綾部惣兵衛(前出)、片野定吉(渋谷町)であった。(帝T11,p371,要録T11,p243)

15年では資本金を130万円に減資、払込87.8万円、河野英良の名はなく、社長都筑六郎、専務清水達也、取締役牧野武治(荏原郡大崎町)、山崎佐太郎(前出)、渡辺三郎(前出)、監査役片野定吉であった。(要録T15,p223)

日本ペニー紡績(7年7月設立)

日本ペニー紡績は河野英良が静岡県大宮町に第一工場の建設を計画し、「精練漂白ヨリ前紡科二関スルー一切ノ器具機械」(株T8,p183)29.6万円、特許権水利権10.0万円、1万坪の工場敷地3万円、3,070坪の工場建築費15.3万円ほかの起業予算を立てて、7年7月10日資本金300万円(払込75万円)で、副蚕を原料とするペニーすなわち「各種屑繭及屑糸の精練漂白並に紡織、各種繭及繭糸屑物類の買入販売並に其委託販売、其他本業に関する一切の事

39) 鉱業信託は7年5月設立、南葛飾郡吾嬬町小村井1000、取締役は吉田銀治(南葛飾郡吾嬬町、日本綿羊紡績取締役)ほか(要録T10役中,p17)

40) 清水達也は松島肇系の日本綿羊毛織、東京屑物市場各取締役(帝T11,職p541)で、清水は親族と目される清水康男、清水八重子、清水俊の名義で日本綿羊毛織が改称した日清毛織「株式八夫々前主カ失権シタルニヨリ、前記清水等ニ於テ競落ニヨリ取得」(事実、大審民10,p551)している。

業」⁴¹⁾を目的として、本社を宝永銅山と同一の東京市京橋区三十間堀3丁目6に置き、資本金300万円、払込75万円で設立された。

中心人物の河野英良(960株)が「創立...成るや...専務取締役役に推され」⁴²⁾たほか、中山佐市[. 参照]が社長に、森田小六郎(前出)、荻野万之助500株(前出)が常務にそれぞれ就任した。⁴³⁾取締役は上甲信弘(前出)、森田退蔵[. 参照]、峰岸慶蔵1,630株(前出)、塩川万作、監査役矢野莊三郎、佐野理八500株、田野井多吉、須藤嘉吉、技師長の上田清次は元鐘紡工場技師長であった。⁴⁴⁾

8年3月中旬に大宮町第一工場(敷地16,380坪、建物2,964坪、円形梳綿機17台、動力450万馬力)がほぼ完成し、5月上旬からペニー製造を開始した。⁴⁵⁾8年12月3,000錘の絹糸紡績を決定した。8年12月末の株主数1,970名、非役員大株主は小口長蔵(前出)1,500株、福原靖700株らであった。(要T9,p42)貸金業者の小口長蔵が役員とはならず、日本ペニー紡績や東日本炭砒などの大株主に登場する背景は、実質的には河野らの小口からの借入金に近い性格を有していた可能性がある。

8年12月末の主要勘定は土地建物55.7万円、機械器具43.2万円、棚卸資産22.8万円、特許権水利権10.0万円、預金8.2万円、支払手形12.0万円、当期利益1.2万円であった。(要T9,p42)9年には森田社長、河野専務は退任しており、峰岸慶蔵が社長、常務は風間礼助[. 参照]、加藤操であった。(株T10,p237)東京瓦斯電気工業に注文した機械が不完全なため、操業は予定通りには運ばなかった。

41) 43) 『大日本銀行会社沿革史』東都通信社、8年、p97

42) 45) 『大日本実業家名鑑』8年、かp9,12

44) 『大日本銀行会社沿革史』p97,持株数は株T8,p183、『大日本実業家名鑑』8年、p12

蔵内次郎作に当該株4万株(76,000株の52.6%に相当)を担保に取って約600万円もの巨額貸付を行っていたと噂された中山佐市の農工貯蓄銀行⁴⁶⁾は「蔵内次郎作氏が過般の打撃で、同氏への貸し出し三、四百万円の整理が着かぬ...蔵内氏からの担保品横浜倉庫の処分がどうしても着かぬ」(T9.11.19東日)ことを理由に大正9年9月27日臨時休業した。

ベニー市価の暴落で経営難に陥った日本ベニー紡績でも河野らは「払込を徴収し、手持製品や原料の評価を高め」(T15.4.5D)る弥縫策に終始したため、一部の株主は解散を唱え、「総会の紛擾と争闘」(T15.4.5D)に明け暮れた。かくして事業目的の主力を絹系紡績に切り換えたのを機に大正11年4月日本絹系紡績に改称、300万円から100万円への段階的減資など一連の財務整理が実施された。整理の効果もあって14年11月期では当期純益35,307円を計上した。14年に6%優先株2万株を発行した結果、前山久吉⁴⁷⁾の主宰する日本徴兵保険11,299株、東京信託6,014株、浜松銀行4,000株の上位3株主で21,313株53.3%と過半数を占めた。社長峰岸慶蔵3,972株9.9%、専務益子勇雄、取締役村上定(内国貯金銀行会長)、稲茂登三郎、望月謹八、

宮本甚七(内国貯金銀行取締役)、足立荘(日本徴兵保険専務、内国貯金銀行取締役)、監査役佐野理八(留任)、田野井多吉(留任)、梅田清(内国貯金銀行取締役)、相談役前山久吉と前山系統で占めた。(要T15,p38)

日本絹系紡績は昭和14年9月近江絹系紡績が経営を受託、昭和15年6月同じく近江絹系紡績の系列になった日本ピロード(本店長浜)を合併した。そして昭和18年6月近江絹系紡績(現オーミケンシ)に合併された。⁴⁸⁾

馬関製紙(7年10月設立)

馬関製紙は7年10月(通覧,p1063)資本金80万円(払込20万円)で製紙業を目的に山口県厚狭郡吉田村に設立された。役員は取締役堀内伊太郎[東日本炭砒取締役]、久保田松吉(神田区)、吉村俊一、竹内辰次郎、岩崎喜三郎、森浅造、監査役河野英良、田中福蔵であった。(要T9,山口p4)

8年12月末の調査では払込20万円、積立金700円、利益12,912円、配当率4%、社債...であった。(通覧p1063)11年には既に監査役に河野英良の名はない。(帝T11,山口p3)紙業雑誌社の調査では馬関製紙の13年度の生産量は包装用紙2,049,000千封度であった。⁴⁹⁾

日本耐酸塗料(7年12月設立)

日本耐酸塗料は7年12月資本金100万円(払込25万円)で耐酸塗料製造を目的に日本橋区呉服町30に設立された。8年12月末の役員は専務行本邦彦800、取締役桂正夫⁵⁰⁾、玉利正助、監査役浜訓良、小平鑑七郎、相談役宇佐川一正(男爵、万寿生命監査役)、上

46) 農工貯蓄銀行は所在地東京、資本金100万円、払込40万円。大蔵省は中山前頭取ら東京府農工銀行重役の行動に不審を抱き、80万円の手形振出による架空取引、80万円を自己の関係企業に融通、有価証券を不当に処分し、代金を農工貯蓄銀行を通じて関係企業に融通、宴会開催等過分な経費支出、旅費の支出不明、行員賞与金の一部を遊興費に使用、行有電話を無断名義書換、3、4万の抵当に20万円の不当貸付を強行しようとして他重役の反対で中止、巨額の臨時事件費の中身、「農工貯蓄銀行が中山前頭取に対し数十万円の不当利得金弁済を要求しながら僅々数十万円にて示談を為したる理由」(T6.8.20B)など10項目の質問書を発した。(T6.8.20B)

47) 前山久吉は東京信託会長、日本徴兵保険、内国貯金銀行各取締役、浜松銀行頭取

48) オーミケンシは『オーミケンシ外史 五十年の歩み』昭和42年、高宮太平『夏川嘉久次と紡績事業』ダイヤモンド社、昭和35年などを参照

49) 『財界二十五年史』帝国興信所、15年,p304

50) 桂正夫は第一福善(株)代表、日本金線製綱取締役、横浜棧橋倉庫監査役(紳T11,上p198)

村行敏,株主数は807名,大株主 高橋かつ
1.182,吉本敬440株であった。(要録T9,p48)
8年12月末の調査では払込25万円,積立金...
円,損失4,934円,配当率...%,社債...(通
覧p48)10年では河野が社長であるが,一方専
務となった行本邦彦は「経済タイムスと云ふ
雑誌を経営して居る」(T8.11.21D)人物で,
8年12月設立の大北炭硯専務,11年8月21日
中外証券信託取締役辞任⁵¹⁾,日本金線製綱代
表取締役,東京楽天地専務などを兼ねた。(要
録T11,役下,p149)

東亜耐火工業(8年1月設立)

東亜耐火工業は8年1月資本金150万円で
「耐火煉瓦製造」(通覧,p38)を目的として京
橋区尾張町二丁目23に設立された。8年11月
末の役員は社長河野英良 2,000,専務春日
俊文(前出),取締役小野沢弥三郎,富沢仙
太郎,木下重太郎⁵²⁾,飯島元太郎,春日善
之助 2,500,監査役風間礼助(前出),三井
徳宝,非役員大株主河野通武 1,500,春日
文平 1,227,春日俊一 1,200株(要T9,p102)

8年12月末の調査では払込37.5万円,積立
金8,000円,利益53,308円,配当率10%,社債
...であった。(通覧p38)その後,長野県下高
井郡平穩村に本店を移転し,京橋区紺屋町6
に東京支店を置いた。長野を地盤とする春日
俊文の影響力が強まったためと解される。11
年には払込37.5万円,社長河野英良は辞任済
みで,専務春日俊文(前出),取締役小野沢
弥三郎,春日善之助(前出),富沢仙太郎,
木下重太郎(前出),飯島元太郎,永井薫馬,
監査役若林忠之助,支配人永井薫馬であった。
(帝T11,長野p13)

国粹美術(8年8月設立)

国粹美術は8年8月(通覧,p137)資本金20
万円,払込5万円で「書画骨董販売」(通
覧,p137)を目的として日本橋区本石町二丁目
15番地に設立された。代表取締役専務小泉徳
兵衛,代表取締役河野英良,取締役中平清治
郎,木下重太郎(前出),中須養三⁵³⁾,長谷川
唯一郎⁵⁴⁾,春日俊文(前出),監査役高木隆吉,
岸衛,風間礼助(前出)であった。(T11.8.10法
律)専務の小泉徳兵衛は明治20年名古屋時計
製造合資を設立,22年伊勢の加太炭坑,加賀
の倶利伽羅山の銀山など採掘を試みたるも,
運非にして中途にして止⁵⁵⁾め,明治末期に
「絵画及絵葉書」(商,p453)を開業,「本邦美術
の擁護者と為り,其の精華を普く海外に紹介
するの趣旨を以て,日本美術品の海外輸出に
努むる泰文社美術館主」⁵⁶⁾となった。国際美
術代表取締役,帝国美術取締役(紳T11,中
p183)

8年12月末の調査では払込5万円,積立金
200円,利益3,110円,配当率9.6%,社債...で
あった。(通覧p137)11年では本店は東京市
京橋区三十間堀2丁目8に置き,資本金200
万円,払込50万円,代表取締役河野英良,小
泉徳兵衛,取締役木下重太郎,中平清太郎,
春日俊文,中須養三,長谷川唯一郎,監査役
風間礼助であった。(帝T11,p287)

国粹美術は日本橋区本石町二丁目15番地に
所在する小泉徳兵衛所有の「推古朝の様式に
則り古雅優美なる四層楼」⁵⁷⁾の不動産を買取
るために9年3月振出した約束手形を巡り河
野側と対立し,訴訟となった。しかし株式会
社が現任取締役を提訴する場合には監査役が
会社を代表するとの商法第八十五条に違反

53) 中須養三は会社員(商,p322),大阪興業,中
央石炭,拓殖水電各取締役(紳T11,中p38),大
日本チタニウム監査役(名鑑13,p49)

54) 長谷川唯一郎は麻,本店栃木県(商,p58)

55) 56) 57) 『大日本重役大観』8年,p44

51) 中外証券信託『第六回営業報告書』11年,p2

52) 木下重太郎は国粹美術取締役(要録T9,p228),
東亜耐火工業取締役(要録T9,p102)

したとして原告の訴は却下された。(T11.8.10法律)この訴訟は『法律新聞』に大きく取り上げられ、単に国粹美術役員内部の対立抗争だけでなく、法律手続きの不備をも世間に露呈する結果となった。15年では払込5万円、小泉徳兵衛は辞任済みで、代表取締役河野英良、取締役木下重太郎、中須養三、長谷川唯一郎、春日俊文、監査役風間礼助であった。(要T15,p175)

日印紡織(8年8月設立)

日印紡織は加島安次郎、児島秀吉を発起人総代として、池上伸三郎、室田義文、今西林三郎、星野錫(前出)、荻野万之助(前出)、河野英良、中沢彦吉、宮崎敬介ほか数十名の発起で、6万株中5.5万株は発起人、賛成人で引受け、残余の5,000株を公募8年8月資本金300万円で大阪市東区今橋3-5に設立された。「邦人の独創発明に係る」「自動丸製(縫ひ目なし)機の創案」(T8.6.13内報)特許権が日印紡織の特色とされ、この「吾国及び印度に於て四個の発明特許を受けたる自動製袋機に依りて、酒醬油類搾袋、洋灰袋、軍用囊、鉍石袋、郵便行囊、貨幣囊、肥料袋、雑穀袋等を初め一般生産品の囊袋を製造供給」(T8.6.13内報)することを目的とした。

株式募集の時、河野英良らは「内地は勿論支那、満洲の市場に伸展し、更に印度にも工場を設置」(T8.6.13内報)するなどと宣伝に努め、「既に政治界に於て体面を失って居た相棒の浅野陽吉君と中軸となって盛んに新株のプレミアムを煽り付け」(事業)、「本事業の前途は一般に有望視」(T8.6.13内報)され、河野は「最初の持株の六七割は七円内外のプレミアム付で売放って三四十万円からの奇利を得た」(事業)ものの、「未だ事業に着手せず、第一回十二円五十銭払込の株式は驚く勿れ只の二円」(事業)とされた。河野英良の虚名が高かったため日綿系統の大阪莫大小紡

織(明治45年設立)の役員(株T10,p205)でもある「大阪の富豪南郷三郎、喜多又蔵、加島安次郎⁵⁸⁾の諸君が...河野君が関係して居る会社であるならば御免を蒙る」(事業)と役員就任を拒否した。河野が排除された結果、大阪莫大小紡織の系列色が濃厚となり、9年11月時点では社長南郷三郎、専務浅野陽吉(前出)、取締役堀文平(大阪莫大小紡織常務)、加島安次郎、監査役喜多又蔵、副島八十六、児島秀吉(株T10,p217)で、浅野陽吉とともに「中軸となって」いたはずの河野英良の名はない。9年11月時点では株主数1,823名、大株主は 大阪莫大小紡織 1万株16.7%、

58) 南郷三郎は貴族院議員南郷茂光の次男に生まれ、明治33年東京高商卒、日本棉花入社、社長の田中市太郎に認められ、田中市兵衛の孫娘と結婚、日本棉花の幹部となり、5年時点では大阪莫大小紡織、神戸棧橋各社長、日本棉花、東洋製紙、大阪海上火災各監査役、日本薬品工業各取締役(帝T5,職p148)。喜多又蔵は明治27年大阪市立商業学校卒、同校長成瀬隆蔵の紹介で日本棉花に入り、32年外国係孟買主任、35年支配人、43年常務を経て大正5年副社長、6年社長となり、大阪莫大小紡織監査役、南洋護謄拓殖、大阪海上火災各取締役、中外貿易、南洋纖維役員などを兼ね、目醒ましい活動をなしたが、「処世のモットーは大胆小心」「悪材料が伴っても、若し半分的好材料があれば必ず遣って見る」(新富豪27,T7.2.23時事)という「斯んな無茶をする」(新富豪27,T7.2.23時事)典型的なリスク愛好者であったため、昭和5年6月不況による損失から日綿系統の一切の事業から引責辞任、昭和7年1月死亡した。(『喜多又蔵君伝』昭和8年)。加島安次郎は明治27年北浜の芝田大吉仲買店に奉公した後、明治41年10月3日大株仲買人として独立・開業、「将来は所謂堅実な事業家として立ちたい願望」(新富豪49,T7.3.21時事)から「私は何か事業に従事したいと希って居るが、未だ何れと定って居らぬので、唯経験の爲めに小会社の重役も二三遣って居る」(新富豪49,T7.3.21時事)うちに、8年時点では「あれにも、之にも、限りなく関係せしめられ」(岡村周量『黄金の渦巻へ』13年,p450)で60余社の役員となったものの、反動恐慌で「泡沫会社の雲散霧消で、敢なき次第となった」(『黄金の渦巻へ』,p450)ため、加島商店の「電話も三個に縮小したうへ、二個までが通話停止を食ってゐる」(『銀行犯罪史』p60)までに没落した。

藤田広三4,200, 加島安次郎3,000, 堀文平1,300, 平林誠1,250株であった。(要T11,p17)

9年11月期の主要資産は土地15.7万円, 特許権11.5万円, 預金30万円ほかで, 収入は利息の1.9万円のみ未開業状態が継続していた。(株T10,p217) 12年3月筆頭株主の大阪莫大小紡織に現金60万円(払込は70万円)で買収された。⁵⁹⁾

鮫川電力(8年10月設立)

鮫川電力は林田亀太郎が創立委員長となり, 8年10月2日福島県南部の常磐炭田・勿来町を流域とする鮫川(さめかわ)流域の「電力供給電気機械製造」(通覧,p69)を目的として資本金300万円, 払込75万円で京橋区銀座三丁目10に設立された。(通覧,p69)社長林田亀太郎 4,000, 常務高木七郎(前出)

2,705, 取締役大島要三 3,700, 小林蔵次, 監査役男爵野田亀喜⁶⁰⁾, 佐藤庄太郎, 大株主は高木清次郎⁶¹⁾ 1,800, 今野八ナ 1,75株であった。⁶²⁾ 9年11月期の主要勘定は資本金300万円, 払込75万円, 工事仮払金68.7万円, 出張所勘定1.3万円, 仮払金1.1万円, 預金3.0万円, 繰越金0.4万円であった。(要録,T10,p241)

11年では本店が京橋区三十間堀三丁目6(宝永銅山本店内)に移転, 資本金が200万円(払込50万円)に減資, 役員も大幅更迭され, 河野以外は無名に近い人物ばかりになってい

59) 『株式会社年鑑』昭和4年, 東洋経済新報,p74, 『明治大正史11会社篇』昭和5年, 実業の世界社,p234, 『明正紡織株式会社二十五年史』昭和12年, 『富士紡績五十年史』昭和22年等を参照。

60) 野田亀喜(滝野川町)は石城耐火煉瓦<高木七郎が取締役>監査役(帝T11,職p326)

61) 高木清次郎は常磐鉱業取締役(名鑑,p97), 日本活動写真, 海外興業各取締役, 日本鉱業監査役(紳T11,上p265)

62) T8.10.4内報, 要録,T9,p251, 持株数は要録,T10,p241

る。取締役は野田亀喜(留任), 渡辺三郎(前出), 河野英良, 内田栄億⁶³⁾, 監査役大内重美(浅草区), 高木巳之吉(福島県石城郡渡辺村), 中根善作(福島県石城郡鮫川村)であった。(要録,T11, p216) 宝永銅山が自社銅山の不振から8年上期に12.5万円で石井留蔵から常磐炭田に属する宇佐美炭礦の鉱業権の全部を急遽買収に踏み切った結果, 河野英良らが常磐炭田を供給区域とする鮫川電力への関与となったものと推測される。

北辰炭砒(8年12月設立)

8年12月20日(T15.8.18法律), 平岡定太郎⁶⁴⁾, 山下秀実⁶⁵⁾を創立委員総代として前

63) 内田栄億(牛込区)は日本栓工監査役(帝T11,職p314)

64) 平岡定太郎は文久3年6月13日兵庫県印南郡志方村の平岡太吉の子に生れ, 神戸師範ほか数校を転々とし, 25年帝国大学法科大学卒, 内務省に入り, 徳島県参事官, 栃木県警察部長, 広島, 宮城, 大阪等の書記官を経て, 39年福島県知事, 41年樺太庁長官に昇任, 「原敬氏の乾児として...手腕家として地方官中に...声名を博した」(『大正人名辞典』p1159)が後退官, 6年11月28日創立の南洋拓殖製糖の社長となった。(T6.11.29読売)南洋製糖は6年11月28日創立総会を開き, 社長平岡定太郎, 常務藤田重之助, 取締役山本藤馬, 原真一[大阪, #糸崎船渠発起人(T8.5.16読売), 富士製鋼取締役(株T8,p638), 14年では1隻1,224トンの船主(『財界二十五年史』15年,p63)], 秋本喜七[代議士, 東京府農工銀行, 田無銀行, 東京薬化学工業各取締役, 玉川水道監査役(紳T11,下p29), 有価証券割賦販売法で廃業した日本公債が69,711株主/87,500株である日本採炭社長, 東京府農工銀行取締役(『大衆人事録』昭和2年, 帝国人事通信社, アp79)], 坪田十郎, 松尾寛三, 監査役西村惣四郎, 吉野周太郎, 伊藤長次郎 100株主を選任した。(T6.11.29読売)南洋製糖は6年11月1万株を7.5円均一のプレミアムで売出した。(小沢福三郎『株界五十年史』昭和8年, p277), 「該地に渡航し親しく実地を視察し, 精査の結果之を買収」(『大日本銀行会社沿革史』, p292)した平岡社長は相談役に退き, 原真一が後任社長となったが, 「栄華物語-松島肇」は「南洋製糖...の会社騒動は今尚世人の記憶に新なもの」(T13.12.21徳毎)とする。

田利彰, 木下新三郎, 今津源右衛門, 河野英良, 藤井光五郎, 栗塚省吾, 秋本豊之進 (T8.10.23内報), 高田早苗, 星野錫 [. 参照], 浅野陽吉 [. 参照]ら270余名の発起人・賛成人により (T8.11.11D), 九州倶楽部で北辰炭砒の創立総会が開催された。8年12月29日資本金100万円で東京市下谷区池之端七軒町28に設立, 9年1月12日設立登記完了した。(T15.8.18法律)

鉦区は北海道空知郡三笠山村の旭炭坑418.7万坪, 白糠郡白糠村の532.3万坪(白糠炭礦合資会社の所有)など合計大小11鉦区を90万円で買収して, 第1期から幌内坑1日150トン, 白糠坑1日100トンの出炭を計画する。当社の収支予算では総収入52.6万円, 純益12.5万円, 第2期には年20%の配当を見込む (T8.10.23内報)も, 「鉦区の大部分は何れも試掘未着手に近き状態」(T9.5.1鉦業)で, 旭炭坑は「現在は全く事業を中止し, 廃坑同様」(T8.11.11D), 特に白糠鉦区は「輸送上に大なる不利が伴ひ」(T8.11.11D), 「同地方は交通不便にして, 且炭質優良ならざるため採炭を計画する者少なく...出炭を見る迄に尚多大の時日を要する状態」(T9.5.1鉦業)のため, 『ダイヤモンド』誌は「目論見書の予想樂觀に失した点が多く, 殊に...鉦区に就ては一層其嫌ひがある」(T8.11.11D), 「露骨に云へば会社が成立しない方が結構」(T8.11.21D)と指摘した。また『日本鉦業新聞』の分析によれば「当社の予算と多大の相違」(T9.5.1鉦業)あり, 「炭量一千万噸を下らず...第一期より利益を挙げ, 第二期に二割, 第三期に三割, 第四期に四割配当をなす」(T9.5.1鉦業)とする「当社の予想利益亦実際に比し著るしく過大」(T9.5.1鉦業)と批判した。

社長平岡定太郎 (前出), 取締役河野英良

65) 山下秀実は亜鉛電解鉦業社長 (株T8,p628), 北辰炭礦発起人

(前出), 間瀬文彦, 都筑六郎 (前出), 早見久五郎, 高橋常次郎⁶⁶⁾, 宮崎源司, 佐藤伊三郎, 山田兵衛, 春日俊文 (前出), 監査役杉山福太郎, 森友徳兵衛, 河瀬滝雄, 池上秀, 今泉文吉であった。⁶⁷⁾

おなじ平岡が社長だった南洋製糖の場合と同様に北辰炭砒でも社長平岡定太郎 (T9.2.21藤本)が退任, 11年には取締役河野英良 (前出), 加藤佐蔵 (福島県坂下町), 石川慶三 [下谷区西黒門町, 兼務なし, 後に清算人], 高橋常次郎 (留任), 安井勝次郎 (札幌) となり (帝T11,p85), パートナーだった都筑六郎・春日俊文らは辞任済みであった。その後の北辰炭砒社長は「七転八起型」⁶⁸⁾の再建型資本家の南俊二 (宝永銅山T9/12 370株)に交代した。南俊二が再建を引受けた大日本製紙の「事業再開後まもなく関東大震災に遭い...大打撃を蒙り, 失敗に終わった」⁶⁹⁾ほか, 相模鉄道では「銀行の担保株を全部引き取る約束...によって一躍大株主となり, とうとう会社の経営権まで握って」⁷⁰⁾おり, 北辰炭砒でも同様な再建手法で社長になったものと思われる。北辰炭砒は「目下...四円位の呼び値があったが, ホンの一時, 忽ち逆戻して今は権利零」(T8.11.21D)の状態となり, 紆余曲折の末, 14年9月4日設立無効の判決が言い渡され, 14年10月6日判決確定, 14年10月19日東京地裁で清算人石川慶三 (前取締役)を選任した。(T15.8.18法律)

中央紙器 中央興業 (9年2月設立)

中央紙器は9年2月24日資本金100万円,

66) 高橋常次郎 (日光町)は日光銀行頭取, 日光電気軌道取締役, 裾野製紙監査役 (帝T11,職p239)

67) T8.12.31 読売, 増田5巻1号, 藤本T9.2.21

68) 菱山辰一『現代事業家列伝』昭和27年,p61, 『苦勞人の苦勞話』昭和30年,p197

69) 70) 『南俊二』昭和40年,p16,70

払込25万円で「紙工品製造販売及請負製紙業」(T9.3.20藤本)を目的に設立された。取締役河野英良, 曾根原重太郎, 鈴木久次郎⁷¹⁾, 大村俊雄, 矢崎好一⁷²⁾, 三谷浄, 監査役木村松之助, 大河原章弘⁷³⁾, 箕田重命であった。(要T9,p138)

10年では「紙工品製造販売各種印刷」(要録,T10,p126)を目的の中央興業に改称済みで, 取締役河野英良, 曾根原重太郎, 木村松之助, 山崎佐太郎, 秋坂新吉, 福田徳久であり, 鈴木久次郎, 矢崎好一, 大河原章弘ら日本綿羊毛織関係者は綿羊事件の関係からか退任済みであった。(要録,T10,p126)11年では本店は三十間堀2-6, 資本金40万円で減資, 払込10万円で取締役河野英良, 徳永斎, 高木七郎(前出), 山崎佐太郎(前出), 監査役福田徳久, 渡辺三郎であった。(帝T11,p143)

日本海上倉庫(9年2月設立)

日本海上倉庫は9年2月設立され, 本店は赤坂区仲町25, 支店神戸, 資本金1,000万円,

71) 鈴木久次郎は代議士, 8年6月27日設立の太平炭礦社長に就任, 8年8月16日設立の起重機製造(株)の取締役 1,000株主に就任(T8/11起重機製造『第一回営業報告書』,p11)

72) 矢崎好一は8年12月設立の帝国毛織紡績監査役(9年7月辞任, 第一期営業報告書), 8年8月16日設立の起重機製造(株)[鈴木久次郎が取締役 1,000株主]の100株主(T8/11起重機製造第1回営業報告書,p12), 東京府大崎と木下川に合計1415錘の旧式設備と賃借の織機18台を有する「余り成績の拳らぬ」(T8.11.1D)毛糸紡績2工場を経営していたが, 日本綿羊毛織に売却し, 同社取締役に就任。9年7月松島系の帝国毛織紡績監査役を辞任(帝国毛織紡績『第一期営業報告書』)

73) 大河原章弘は北海道パルプ製紙取締役, 中央興業監査役(紳T11,上p132), 8年11月日本綿羊毛織発起人・取締役(要録T9,p63)として同社内紛では鈴木久次郎派に所属(T9.12.26東日)し, 「矢崎を恐喝して数千円を騙取したなど数多の不正行為ある」(T9.11.28北海)と報じられた人物。松島肇系統の唐津炭礦取締役(名鑑13,p43)

払込250万円, 取締役内海健郎[横浜, 横浜共運取締役(帝T11,職p315)], 美濃村芳雄, 河野英良, 監査役吉井鉄四郎⁷⁴⁾, 佐藤信夫(兼務なし)であった。(帝T11,p48)

帝国土地開墾(9年6月設立)

河野は8年4月福泉河野耕地整理との名称の下に「個人事業として愛知県渥美郡福江港に接する海面を埋立て耕地整理をなし, 其地積三百五十町歩に達し, 外に七十町歩の養魚池を計画し, 目下其起業中に属す」⁷⁵⁾計画地の位置する渥美半島は従来から全国有数の養魚池の好適地であるうえ, 耕地整理法に基づく諸税免除, 開墾助成法による利子補給, 「多大の賛意を表し本事業を認可した」(T8.4.16内報)地元愛知県による補助などの諸特典があると期待していた。とくに開墾助成法公布後, 助成対象の先鞭をつけた事業として注目され, 河野は「生ずる利益又年額二十万円を下らざるべし」(T8.4.16内報)と豪語したが, 「名古屋方面の有力家は本事業の有利なるに垂涎し荐りに会社組織と為すべく慫慂」(T8.4.16内報)したほどという。工事一切は大倉組に請負わせ, 必要となる総工事費約40万円は「一部埋立完成毎に之を担保として, 特殊銀行より金融を仰ぐ」(T8.4.16内報)計画であった。

9年6月当該埋立事業を目的に帝国土地開墾を設立, 京橋区三十間堀3-6(宝永銅山内), 資本金100万円, 払込30万円, 取締役河野英良, 春日俊文(前出), 三宅康治(日本橋), 友成四郎⁷⁶⁾, 渡辺三郎(前出), 本多勇雄, 監査役鈴木富士弥(前出), 英修作(前出)であった。(要録T11,p197)

74) 吉井鉄四郎(神戸)は神戸労働社長, 自動車運送代表取締役(帝T11,職p207)

75) 78)『大日本実業家名鑑』8年, かp9

湘南漁業

神奈川県鎌倉郡鎌倉町乱橋材木座, 資本金8万円, 払込2万円(要T15, 神奈川p25), 社長河野英良(紳T14, p274)

東京食品市場, 東亜冷蔵庫(計画)

東京食品市場は7年5月設立され, 11年には本店京橋区北槇町14, 資本金20万円, 払込10万円, 専務中島行一, 常務小倉喜作, 取締役高橋順平, 三好徳松, 杉綱宗一, 監査役松本良太郎⁷⁷⁾, 桐原貞吉, 江守清次郎であった。(要T11, p99) 河野英良は7年ころから計画された東京食品市場(株)の品川埋立地進出計画に関与したが, 13年11月21日の東日は請負業者の中村組・中村藤平からの1.5万円の保証金納入を巡り, 東京食品市場(株)の専務中島行一と河野らに不正行為があったとし, 河野は「東亜冷蔵庫なる株式会社を創立すべく計画し, 創立委員長に実業家若尾謹之助氏を据えん運動中」(T13.11.21東日)で, 代議士の春日俊文らも世田谷署で密談したと報じた。このため13年11月25日の新聞に事実無根で「素より何等の確執支障なし」(T13.11.25東日)との弁明を河野の名で広告した。(T13.11.25東日)その中で河野は「抑々本事業は日常食糧品市価を低下せしめ, 都下三百万人の生活経済に資すべき社会事業の見地に立て企画したる物に有之...中村組と契約を結び保証金を納入せしめ, 工事に着手したる事実, 及び一百万円の

全額株式会社創立企画の事も之亦事実に相違無之...」(T13.11.25東日)と, 部分的には記事を認めた。東日の報道は一部事実無根であったにせよ, 河野らの「折角の企画に甚大なる支障を来し」(T13.11.25東日), 同時に彼自身の信用をさらに低下させたことは否定できまい。

東京屑物市場

8年10月三河島町に設立され, 社長平出喜三郎[参照], 専務春日俊文(前出), 取締役太田丙子郎, 伊賀歌吉, 清水達也(前出), 広居精一郎, 都筑六郎(前出), 佐久間良三, 監査役深尾隆太郎, 高田重太郎, 山口重太郎(帝T11, p116)

河野商事(計画)

河野は関係事業拡大に伴い, 7年末「家族経営として資本金二百万円の河野商事会社の創立を計画し以て貿易, 鉱山, 開墾其他一般の商行為に従事する企画」⁷⁸⁾を立て, 京橋区元数寄屋町2丁目に河野商事会社の事務所を建築すべく270坪の敷地を購入, 居住者にたいして家屋明渡しの訴訟を起した。(T7.10.4内報)

亜鉛電解鋳業(大正5年11月設立)

主唱者の小出淳太が5年11月資本金250万円で「亜鉛電解鋳業を起し, 將に面目を一新」(T5.8.31報知)し, また「浅野<陽吉>君は, 政界を断念して実業家たらんとして亜鉛電解...等へも関係」(事業)したとされる。亜鉛電解鋳業は小出が取締役を兼ねていた亜鉛電気製錬を25.2万円で買収した。この亜鉛電気製錬は明治45年6月新潟県に資本金30万円で設立され, 大正5年1月本店を京橋区銀座三丁目に移転(帝T5, p222), 5年の払込9.3万円, 筆頭取締役は飯田巽[日本練炭取締役, 日本郵船監査役(要T5)]であった。(諸T5,

76) 友成四郎(北豊島郡日暮里町大字日暮里)は大北炭礦取締役支配人, 日本国債(株)役員, 帝国化学製麻取締役, 大日本蚕糸紡織監査役(要録, T11役上p118), 中央馬來護謨興業取締役(紳T11, 上p112)。大正末期には下谷区中三崎町18, 大北炭礦, 日本商事相互, 北海中央電鉄, 日華燃料, 帝国化学製麻, 帝国土地開墾各取締役, 大日本蚕糸紡織監査役(要録, T15役上p100)

77) 松本良太郎は南洋郵船取締役, 日本無砂精米監査役, 釧勝興業監査役(名鑑, p60), 日本海運監査役(要録T9, p46)

上p253) また類似名の亜鉛電解特許権(株)は大正元年11月京橋区銀座3-9に資本金22万円で作成され、やはり小出が 192株主であった。(要T9,p240)

亜鉛電解鋳業は7年上期で払込金175万円、株主数765名、能力月産180トン、社長山下秀実(前出)、専務小森玄一郎、取締役安部幸之助、加島安治郎、小出淳太、久我金三郎、山口誠太郎、牧山熊二郎、監査役西田信吉、古賀三千人、長谷川吉次であった。(株T8,p628) 8年には払込200万円、積立金11,910円、利益14,947円、配当...であった。(通覧,p29) 9年には払込225万円、支配人牧野栄次郎であった。(要T9,p240)

・河野英良のパートナー群像

ここで河野英良のパートナーとして取り上げた14名のうち、大正5年時点で資産額50万円以上の資産家としてリストアップされているのは、中山佐市200万円、森田退蔵80万円⁷⁹⁾の2名だけである。残余の資本家は、大正6年以降に資産額を急増させた、多分に「成金」⁸⁰⁾的な人物である可能性が高い。⁸¹⁾ また大正11年時点で星野錫は18社の役員を兼務して、『実業之日本』誌選定の「日本重役肩書数番付」⁸²⁾において前頭に選定されている。以下共同投資回数が多いなど、河野と親密な順に取り上げてみよう。

79) 渋谷隆一ほか「大正初期の大資産家名簿」『地方金融史研究』第14号、1983年4月、p41～81

80) 「成金」は前掲拙稿「企業家と虚業家」『企業家研究』第2号、p63参照

81) 加島、喜多、南郷三郎(注58参照)および日本海運での河野の上司に当る佐伯俊太郎、犬上慶五郎らは6～7年『時事新報』連載の「新富豪物語」に「成金」として登場する。

82) 12年1月15日『実業之日本』、p80

浅野陽吉

明治元年3月3日福岡県御井郡古賀の久留米藩士浅野為三郎の長男に生れ、福岡県立久留米中学校卒、明治25年東京高等商業学校卒業(第一期生)、「兼て文筆に長」⁸³⁾じていたため、上州新聞主筆、日本新聞、福陵新報主筆(T5.2.27保銀)など各紙で健筆を揮った。この間、嘉穂郡の幸袋製作所の経営に関与したり、32年久留米商業学校長を経て、明治37年3月久留米から初当選以後3回当選の憲政会所属代議士として「同党中の財政通」(T6.1.20保銀)となった。代議士当選後、再び新聞記者となり、大阪朝日新聞の財政記者・実業欄主筆を経て、41年『筑後新聞』を日刊として共同経営した。⁸⁴⁾

浅野陽吉は「大正六年迄代議士として立憲政友会に属し、政務調査委員」⁸⁵⁾であったが、6年4月の選挙に敗れた。また「虚業家」高倉藤平の下でナンバー2として有隣生命、浪速火災両社の専務、帝国土地取締役を兼ねた。しかし高倉藤平の死後、浪速火災の相次ぐ経営難を持って余っていた高倉家は福岡の太田清蔵に売却後、原錦吾らの共同経営の下で7年10月日本共立火災保険と改称した。⁸⁶⁾ 有隣生命の方も大正5年「神国生命の同社を併するに及びて、其職を辞」⁸⁷⁾した。6年9月の調査では浅野陽吉(赤坂区青山北、会社員)は正味身代、商内高ともに未詳、取引先の信用の程度は5段階の中位C a、所得税...円(商,p512)であった。

83) 85) 87) 『大正人名辞典』6年、p446

84) 篠原正一『久留米人物誌』昭和56年、p40

86) 『高倉藤平伝』p171。ただし共立側では「営業成績遂に振はずにゐた」浪速火災を7年12月「買収し、これを基礎として設立」(『銀行会社事業興信録』昭和8年、人事興信所、p1066)したと解している。拙稿「大正バブル期における起業活動とリスク管理 - 高倉藤平・為三経営の日本積善銀行破綻の背景 - 」『滋賀大学経済学部研究年報』第10巻、平成15年12月参照

「政界では陣笠代議士で遂に成功の見込みがないと極印づけられた浅野<陽吉>君は、政界を断念して実業家たらんとして亜鉛電解や、河野<英良>君の生命の如くして居る宝永銅山等へも関係して居た(事業)とされる。日印紡織株式募集の時、「既に政治界に於て体面を失って居た」(事業)浅野陽吉は河野英良の相棒として中軸となって活躍した。

大正8年6月資本金20万円、払込5万円で東京特種印刷を設立し社長となった(要T9,p109)ほか、鶴善製菓(株)取締役(紳T11,下p23)などを兼ねた。しかし関与した企業の相次ぐ不振により、「実業界進出の志は挫折」⁸⁸⁾、浅野は失意のうちに昭和2年郷里の久留米に戻って是々庵に幽居、「郷土史の研究に心血を傾注...事蹟の顕彰につとめ」⁸⁹⁾、多くの優れた著作を遺して昭和19年2月12日死亡した。浅野が指導した郷土史家には『久留米人物誌』を著した篠原正一、鶴久二郎などがいる。

浅野の多彩を極めた経歴は新聞記者、政治家、事業家、教育者などの経歴が重疊的に混在・振幅を繰り返しており、人生の発展段階として明確な時代区分が難しい。何でもこなす反面、多分に器用貧乏の傾向が見られ、彼自身も一芸に専念できなかった嫌いがある。特に事業家としては成功した事例が皆無に近い。また浪速火災での失脚の原因に見られるように、他社の回避した遊郭、港町、密集地などのハイリスク物件に集中的に付保するなど経営態度が安易に流れ、リスク管理能力が大きく欠如していたものと判断される。その意味で晩年の郷土史家こそが、彼の能力を最大限に発揮できる最後の晴れ舞台であったようだ。

88) 篠原正一『久留米人物誌』昭和56年,p40

89) 豊田三郎・鶴久二郎編『浅野陽吉』昭和47年,p8

峰岸慶蔵

峰岸慶蔵(深川区佐賀町)は明治8年8月栃木県の請負業者峰岸覚之丞の弟に生まれ、浜口儀兵衛商店雑穀部に勤務後、明治42年独立して米穀肥料問屋を経営、5年時点で日清紡織450、満鉄390株⁹⁰⁾、6年所得税家族分とも295円、7年1月調査で12年前に米雑穀肥料商を開業、正味身代10~15万円、商内高未詳、取引先の信用の程度5段階の中段C a(商,p572)、9年で宝永銅山監査役T9/12 1,000株、日本ペニー紡績 1,630株(要T9,p42)、東日本炭砒 2,100株(要T9,p281)、一柳産物各取締役(要録,T9役下p139)、産業貿易取締役、流山鉄道監査役(要録,T15役下p219)等を兼ねた。東京紡績1,000、日本鋼管457、南満洲鉄道450、帝国製糖400、京成200、東株100ほか計12銘柄3,397株主であった。⁹¹⁾11年では米穀肥料商、日本ペニー紡績社長、一柳産物取締役、所得税3480円、営業税2538円(紳T11,下p91)。13年には雑穀肥料商、会社役員、対物信用100~150万円、対人信用厚、年商500~1千万円、盛衰は盛(帝信,p345)、14年には南満洲鉄道旧300、新200、電気化学旧200、日清紡績旧200、日本窒素肥料旧300、新440計4銘柄1,640株主であった。⁹²⁾東京米穀商品取引所第三部取引員⁹³⁾なお日本絹糸紡績社長として静岡県大宮銀行から6万円借入れた件で、後に訴訟となった。(T14.2.3法律)

春日俊文

春日俊文は明治6年4月長野県の春日七郎右衛門の次男に生れ、28年法政大学卒、3年8月8日成田・本埜村9哩50鎖(建設費予算

90)『全国株主要覧』6年,p415

91)『全国株主要覧』8年,下p391

92)『全国株主年鑑』15年,経済之日本社,p164

93)『大衆人事録』昭和2年,帝国人事通信社,三p52

300万円)を免許された印旛電気鉄道(成田急行電鉄)の発起人総代,6年発行の『全国株主要覧』になし。金倉鉦山事務所を営する傍ら,大正9年代議士当選⁹⁴⁾、「鉄道大臣小川平吉...の腹心」⁹⁵⁾,大正8年1月設立の東亜耐火工業専務(要T9,p102),8年7月設立の国粹美術取締役(要T9,p228),9年1月設立の北辰炭礦取締役(増田5巻1号),宝永銅山T9/12 160株,帝国土地開墾取締役,東亜耐火工業(長野県)専務(要録,T11,p9),9年9月6日宝永銅山取締役辞任(T9.10.20鉦業),『全国株主年鑑』15年になし。東亜耐火工業専務,大日本土地,東京屑物市場各取締役(要T15,役上p191)

都筑六郎

都筑六郎(下谷区谷中清水町)は大正5年には富国肥料取締役,英無煙炭礦専務(帝T5,職p130),5年時点で『全国株主要覧』6年になし。7年発行の『商工信用録 38版』に該当なし,9年には宝永銅山専務T9/12 300株,北辰炭礫取締役(要録,T9役中p76),東日本炭礫取締役(要録,T9役中p76),千沢平三郎らと大正鉦業取締役(帝T11,p195),10年1月28日宝永銅山取締役を退任(T10.4.1鉦業)宝永銅山T10/6 1000株,13年では東日本炭礫ほか会社役員,対物信用・1~2万円,対人信用普通,年商3千円~5千円,盛衰は常態(帝信,p170),『全国株主年鑑』15年なし。

94)『大衆人事録』3版,昭和5年,帝国人事通信社,カp53。専務の東亜耐火工業非役員大株主の春日文平 1,227,春日俊一(子息) 1,200株(要T9,p102)は親族

95)私鉄疑獄事件「予審終結決定書」(S6.10.23法律)には「長野県埴科郡屋代町大字屋代...住居東京府豊多摩郡渋谷町大山...会社員...東京市麹町区内幸町一丁目四番地...俊文の経営せる金倉鉦山事務所」とある。

風間礼助

風間礼助(渋谷町)は大正5年には帝国活動写真,日本芳醸各取締役(帝T5,職p96),5年時点で『全国株主要覧』6年になし。6年9月調査では会社員,正味身代未詳,商内高未詳,取引先の信用程度5段階の中位Ca(商,p214),日本ペニー紡績常務(株T10,p237),東亜耐火工業監査役(要T9,p102),国粹美術監査役(要T9,p228),11年には帝国活動写真取締役,九州海運,南洋農産,九州製鉄各監査役,所得税84円(紳T11,中p206),13年では信濃石材役員,対物信用・5千円~1万円,対人信用普通,年商3千円~5千円,盛衰は常態(帝信,p125),『全国株主年鑑』15年なし。

森田小六郎

森田小六郎(千駄ヶ谷町原宿)は憲政会の前代議士(T8.11.21D),5年時点で『全国株主要覧』6年になし,6年12月常盤採炭発起人(T8.10.28内報),7年2月調査では正味身代未詳,商内高未詳,取引先の信用程度5段階の中位Ca(商,p625),日本ペニー紡績,中央窯業原料各取締役(要録,T9役下p191),大北炭礫発起人総代,11年には富士絹紡,紡績器具製造,中央窯業原料各取締役,富機織布,内国石材工業監査役(紳T11,下p147),13年では会社役員,対物信用未詳,対人信用普通,年商未詳,盛衰は衰(帝信,p377),『全国株主年鑑』15年なし。

英修作

英修作(芝区芝公園)は5年時点で『全国株主要覧』6年になし。5年度の所得税44円,6年12月調査では雑業を20年前開業,正味身代・負債,商内高未詳,取引先の信用程度5段階の下から2位Da(商,p65),土木請負・英組(紳T11,上p62),宝永銅山監査役(要T15,役上p55)T9/12 27100株,帝国土地

開墾監査役(要録T11,p197),13年では元土木建築請負,対物信用・負債,対人信用薄,年商未詳,盛衰は衰(帝信,p38),大日本土地各監査役(要録,T15役上p54),『全国株主年鑑』15年なし。

広沢金次郎

広沢金次郎(東京市赤坂区青山南町)は維新に功あった山口藩士・参議の広沢真臣の子で,伯爵,貴族院議員,特命全権公使,4年2月2日付で免許された近若鉄道発起人総代,京津電気鉄道の発起人・華族派委員,5年には朝鮮煙草社長(帝T5,職p278),6年度の所得税177円,6年1月調査では正味身代未詳,商内高未詳,取引先の信用程度5段階の中位C a(商,p625),9年では東武鉄道新800日本製鋼50計850株主⁹⁶⁾,10年の所得税106円(紳T11,下p128)

平出喜三郎(二代)

平出喜三郎(函館市船見町)は明治9年生まれ,初代の養子,慶應義塾卒,大正4年函館銀行監査役,5年では奥尻鉱山代表取締役,博済生命,極東護謨各取締役(帝T5,職p282),5年度460円,6年12月調査では先代開業の漁業兼物産運送,正味身代40~50万円,収入3.5~5万円,取引先の信用程度5段階の上から2位B a(商,p138),8年9月大北炭礫発起人総代(T8.9.4読売),7年には若松炭礫400,日本海上150,神戸海上100,千代田火災100,共同火災60,計5銘柄810株主⁹⁷⁾,11年には代議士,海産物商,所得税971円,営業税151円(紳T11,函館p13),函館果実野菜市場代表取締役,函館銀行,東亜拓殖澱粉,大北火災保険,北海魚網船具各監査役,函館貿易,函館陶器,東京屑物市場各取締役(要録,T11役

下p211),若松炭礫取締役(名鑑13,p42),13年では先代からの海産物漁業運送,東京屑物市場社長ほか会社役員,対物信用未詳,対人信用厚,年商未詳,盛衰は常態(帝信,p371)

千沢平三郎

千沢平三郎(下谷区茅町)は11年12月14日報徳銀行と同時に休業した下谷銀行頭取千沢専助の養子である。⁹⁸⁾千沢は明治元年12月大阪の岡ゑん子の長男に生れ,千沢家の養子となり,千沢専助の娘まさ子と結婚⁹⁹⁾し,明治39年1月曾木電気創立時に1,000株出資,野口遵名義の1,000株を併せて,野口は千沢平三郎が支配人の下谷銀行から10万円を借用した。野口の飲み友達¹⁰⁰⁾で,島田鹿三(後に窒素の鏡工場建設本部長に就任),井上駒次郎らとともに,野口に勧誘されて日本カーバイドにも出資した。¹⁰¹⁾明治41年には下谷銀行支配人,高崎水力電気取締役,大石沢鉱山取締役(要録M41,役p102),大正5年には下谷銀行監督,東洋貯蓄銀行,茨城炭礫各取締役(帝T5,職p52),6年時点で桧山鉱山(岩手県和賀郡湯田村の金銀銅山,5年銅精鉱24トン産出)を所有(名鑑,p64),6年度の所得税38円,6年9月調査では会社員,正味身代未詳,商内高未詳,取引先の信用程度5段階の中位C a(商,p115),9年には大日本炭礫取締役(株T8,p618)旧1,812新3,458窒素200,計5,470株主,宝永銅山T9/12 650株。11年時点では下谷銀行業務担当社員,北海水産社長,大日本炭礫常務,宝永銅山,石城鉱業各取締役,所得税55円(紳T11,上p113),都筑六郎(前出),高田直三郎¹⁰²⁾らと大正鉱業取締役(帝T11,p195)を兼ねた。13年で

99)『一九二四年に於ける大日本人物史』13年,ちp2

100)101)『野口遵翁追想録』昭和27年,p58,66

102)高田直三郎は松島肇系企業の日華採炭取締役(帝T11,職p243)

96)98)『全国株主要覧』9年版,下p489,上p326
97)『全国株主要覧』8年,下p511

は流山鉄道ほか会社役員，対物信用・3,000円以下，対人信用普通，年商未詳，盛衰は衰と判定された。（帝信,p67）

千沢平三郎は鉱山業への関与がずば抜けて多く，野口に勧誘されてハイリスクな企業に次々に出資するなど，投機的な性向が随所にうかがえる。おそらく河野の巧みな「煽り」にも乗せられたものと思われる。金融機関の経営者としては好ましがらざるタイプと考えられる。

森田退蔵

森田退蔵（西多摩郡熊川村／麻布区東鳥居坂町）は大正5年には製糸業，東京府農工銀行，農工貯蓄銀行，扇町屋銀行各取締役，所沢銀行，多摩銀行各監査役（帝T5,職p287），6年所得税565円，6年10月調査で37年前に製糸兼会社員開業，正味身代未詳，商内高50～75万円，取引先の信用の程度5段階の上から2位B a（商，p624），11年には東京府農工銀行，農工貯蓄銀行各頭取，御徳炭礦社長，坂戸銀行，扇町屋銀行，多摩銀行，山陽炭礦各取締役，所沢銀行，若松炭礦，金六鑄鉄各監査役¹⁰³），13年には製糸，対物信用未詳，対人信用普通，年商未詳，盛衰は衰（帝信,p377）

中山佐市

投機的な銀行家として中山佐市（東京市麻布区今井町）を挙げよう。中山は大蔵省銀行局勤務の下級官吏を経て，非凡な才能を買った田尻稲二郎男爵の推薦により設立時の東京府農工銀行に入行し支配人となり，「財界の星亨」¹⁰⁴）といわれるほど「屢々顔る付きの

大迷惑を為し，市場『中山筋』又は『農工筋』として喧伝せられ」¹⁰⁵），農工貯蓄銀行，東洋製材，家満佐貯蓄銀行¹⁰⁶）各取締役，東洋硝子監査役（紳M41,p384），明治41年時点で門司船渠（明治40年7月設立）取締役¹⁰⁸）。明治44年時点で農工貯蓄銀行専務，東京農工銀行支配人，千代田瓦斯監査役（要録M44,役p267），明治45年には東京府農工銀行頭取に昇任¹⁰⁷），大正5年時点では東京府農工銀行頭取，農工貯蓄銀行取締役，門司興業，横浜電気鉄道各監査役（帝T5，職p142），6年所得税329円，6年2月調査で会社員，正味身代未詳，商内高未詳，取引先の信用の程度5段階の中位C a（商信,p317）。7年時点では門司興業取締役，横浜電気鉄道監査役のみ¹⁰⁹），大正7年時点では井手郷助経営の大東ビルブローカー銀行監査役¹¹⁰），井手系統の日東保証信託常任監査役，北海道採炭社長（名鑑13,p28）などを兼ねた。13年には横浜土地ほか会社役員，対物信用100～150万円，対人信用普通，年商5～7万円，盛衰は常態（帝信,p186）

星野錫

星野錫（日本橋区浜町）は安政元年12月姫路藩士星野乾八の長男に生まれ，明治6年から製本印刷を営み，20年米国視察後，王子製紙勤務を経て，明治29年王子製紙分工場を分離，東京印刷を発起して専務，初代社長となり，明治45年東京選出代議士，その後「種々の事業に参画...資性温雅にして長者の風があり，財界の人格者」¹¹¹）と称された。たとえば

106) 家満佐<ヤマサ>貯蓄銀行は醤油醸造業の浜口家の経営，明治39年8月農工貯蓄銀行と改称（前掲『大日本銀行会社沿革史』,p36）

108) 『日韓商工人名録』明治41年,p59

109) 『大日本重役大観』7年,p57

110) 『大日本銀行会社沿革史』,p38,74

111) 112) 『銀行会社事業興信録』昭和8年，人事興信所,p265

103) 紳T11,下p146，『一九二四年に於ける大日本人物史』13年，もp10

104) 105) 107) 遠間平一郎『財界一百人』明治45年,p173

日本葡萄酒,北海道雨竜鉄道,日本倉庫,東京セロファン各社長,東京醸造会長,日本化学繊維,田園都市各取締役,大日本製糖,帝国電灯,王子電気軌道各監査役,東京米穀商品取引所理事¹¹²⁾などである。このほか馬来護謨公司取締役,4年4月桑名貯蓄銀行が東京市京橋区に移転し改称した帝国実業貯金銀行相談役¹¹³⁾,5年9月末現在の池上電気鉄道発起人・賛成人100株主,6年2月日米信託の前身・内外信託の発起人¹¹⁴⁾,6年所得税700円,6年10月調査で会社員,正味身代未詳,商内高2~3.5万円,取引先の信用の程度5段階の中位C a(商,p100)。7年設立の日本博善(鎌倉河岸の博善社を継承,資本金100万円)の発起人総代(T7.5.5読売),7年10月設立の日東炭礦相談役700株主,日米信託常任監査役,8年では大日本製糖1,650,富士製鋼1,500,日米信託1,000,日本紙器906,日本絹絨紡績700,馬来護謨300,星製薬200,東株50ほか計13銘柄7,286株主¹¹⁵⁾,山田岡炭礦監査役(名鑑13,p79),13年には東京印刷社長ほか会社役員,対物信用15~20万円,対人信用普通,年商3~5万円,盛衰は常態(帝信,p58),昭和13年11月死亡した。¹¹⁶⁾

星野錫はバブル期に,数多くの泡沫企業に関与した典型的なバブル経営者の一人と考えられる。田園都市のように成功したものもあるが,富士製鋼,日米信託,日本葡萄酒¹¹⁷⁾など問題企業も少なくなかった。

竹村欽次郎

竹村欽次郎(本郷区西片町)は文久3年1月12日山形県最上郡新庄町の古沢鉄之助の四男¹¹⁸⁾に生れ,竹村勝行の養子となり,上京して一高を経て明治21年東京帝国大学法科大学卒,大蔵省に入り主税官試補,青森県・富山県収税長,大阪府税務官,新潟県司税官を歴任後,31年10月理財局国庫課長で退官,32年日本鉄道会計課長,同経理課長,37年日本興業銀行囑託に転じ,38年小野田セメント取締役,39年3月「日本興業銀行に入り,波佐見金山の会計監督として同四十二年迄勤務」¹¹⁹⁾した。

44年小野金六らと富士身延鉄道を創立,専務に就任,45年郷里の山形県郡部より代議士当選,5年時点で『全国株主要覧』6年になし。大正5年には富士身延鉄道取締役(帝T5,職p124),6年所得税59円,6年11月調査で会社員,正味身代未詳,商内高2~3千円,取引先の信用の程度5段階の中位C a(商,p278)。8年には富士身延鉄道常務,草津軽便鉄道取締役,帝国商業銀行監査役¹²⁰⁾,「資性豁達,容貌優雅にして態度鷹揚,毫も据傲の挙止なく,当代稀に見るの人物」¹²¹⁾と評された。大正12年「日本国債株式会社社長に任じ,其蘊蓄を傾けて経営す。社業益々隆盛に趣く。又故ありと云ふべし」¹²²⁾,大日本国債取締役ほか。9年12月27日東日本炭硯監査役辞任(T10.3.1鉱業),13年には富士身延鉄道ほか会社役員,対物信用・負債,対人信用薄,年商未詳,盛衰は衰,取引停止者(帝信,p164),14年には京成電気軌道旧200,新200株主であった。¹²³⁾

113)『大日本銀行会社沿革史』,p38,74

114)6年2月『大阪銀行通信録』

115)『全国株主要覧』8年,上p277

116)『星野錫翁伝』昭和10年,星野錫翁感謝会,石田朗『東京の米穀取引所 戦前の理事長』1992年,p278

117)10年5月左右田貯蓄銀行から25万円手形割引を受け,訴訟となったシャンパン会社の後身の代表取締役(T13.3.18法律)

118)『大日本重役大観』8年,p28

119)122)『一九二四年に於ける大日本人物史』13年,たp56

120)『大日本実業家名鑑』8年,たp7

121)丹羽錠三郎『銀行会社と其幹部』7年,p144

123)『全国株主年鑑』15年,経済之日本社,p77

むすびにかえて

上述の通り、河野のパートナーの略歴、兼務先、人物評を概観すると、その特色として例えば政治家（星野、浅野、春日、森田小六郎、平出、竹村、広沢）が多いこと、鉱業家（千沢、森田退蔵、星野、春日、都筑、平出、鈴木）が多いことなどが挙げられる。「酒を嗜まず、茶にも親しまず、事業等其ものを無二の趣味とす」¹²⁴⁾る「煽り屋」(事業)「事業屋」(事業)と称された河野自身の資質や性向も、友として交わっていたパートナーの性格を探ることにより可能となろう。

パートナーの資本家としての属性を分析すると、当初からの親密な投資仲間（浅野、峰岸、春日ら）。後に加わったダミー的存在（英修作ら）。当初のパトロンの存在（星野ら）。支援銀行家（千沢、森田退蔵、中山、竹村ら）。「名義貸」的資本家（広沢ら）。地方の資産家（平出ら）¹²⁵⁾など少なくとも数種に分類可能である。

の類型は河野と対等な関係で出資し、経営に参画した文字通りのパートナーで、紳士録等にも掲載されるほどそこそこの資産を有する資本家と思われる。これに対しての類型は資産力に劣り、兼務役員数も概して乏しく、明らかにより劣後した資本家と考えられる。当初の類型の資本家と共同投資関係にあった河野が信頼関係を喪失して、河野主導のシンジケートが瓦解した後、抜けた役員ポストを埋めるために登用された劣後資本家がの類型であると想像される。すなわちパートナーの信用度の劣化が河野本人の信用格付けの低落につながっていると思われる。

124) 『大日本実業家名鑑』8年、かp9

125) 平出喜三郎家と函館銀行に関しては吉田賢一「両大戦間における北海道内地方銀行(上) 函館銀行・百十三銀行・(旧)北海道銀行を中心として」『地方金融史研究』第32号、平成13年3月、p40以下参照。

これに対して、の類型の資本家は河野に比して、財界での知名度()、金融力()、社会的名声()などの諸点でより優位に立つ人物と考えられ、「煽り屋ではないかと兜町辺では噂されて居る」(事業)河野の方から、より上位の資本家に働きかけて、主宰する新設会社を有望事業だと煽り立て、共同投資事業に彼らのパワーを大いに利用しようとしたものと見られる。典型的には後に家業の銀行を潰してしまう千沢など、概してリスク管理に甘く、容易に危険な事業にひきずりこまれやすい性向が見て取れる。

の類型の資本家は地方に在住しているため、概して中央の情報に疎く、河野らが情報の非対称性を利用して地方での投資対象の不足に悩む彼らの余剰資金を共同投資事業の方に巧みに誘導したものと思われる。河野が中央での信用を失墜しつつある時期においても地方での共同投資事業を展開可能であったのは、この類型の資本家が概して名誉慾が旺盛で、たとえ泡沫企業であっても中央の企業の役員の肩書き保持に固執する性向に着目したためであろう。

最後に、今回選定した河野のパートナー14名の中に、信用格付けが低下したり、破綻同然の末路を暗示させる資本家・経営者がすくなく存在した事実を指摘しておきたい。その信用低下現象が河野の没落そのものから派生したものでどうかは、なお検討の余地がある。しかし大正中期にこうした泡沫企業の発起や経営に関与した資本家・資産家同士の相互関係を河野に焦点を当てて解析した本稿は、破綻のメカニズムの一要素として彼らが「同業、協力、貸借、共鳴、連携、共働、競合等、様々な場面で相互に複雑に重層的に絡み合っていた」¹²⁶⁾「負の連鎖」という筆者なりの仮説の一証左たりうるのではないかと考えている。

126) 拙著『企業破綻と金融破綻 - 負の連鎖とリスク増幅のメカニズム -』、九州大学出版会、平成14年、p514